Waku Shunzo

和久峻三

長編推理小説
文庫書下ろし

首吊り判事

京都のテミス女裁判官

KOBUNSHA BUNKO

光文社文庫

文庫書下ろし／長編推理小説
首吊り判事　京都のテミス女裁判官
著者　和久峻三

2004年2月20日　初版1刷発行

発行者　八木沢一寿
印刷　堀内印刷
製本　ナショナル製本

発行所　株式会社 光文社
〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6
電話　(03)5395-8149　編集部
8114　販売部
8125　業務部
振替　00160-3-115347

© Shunzō Waku 2004

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。
ISBN4-334-73628-9　Printed in Japan

Ⓡ本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

光文社文庫

文庫書下ろし／長編推理小説

首吊り判事

京都のテミス女裁判官

和久峻三（わくしゅんぞう）

光　文　社

この作品は光文社文庫のために書下ろされました。

首吊り判事

目 次

第一章　テミスの末裔（まつえい）―― 5
第二章　容疑者の香り―― 65
第三章　犬の神話―― 106
第四章　隠された手がかり―― 199
エピローグ―― 266

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章　テミスの末裔（まつえい）

1

京都地方裁判所刑事第四部の統括判事である松宮亜紀子（まつみやあきこ）が、二人の陪席裁判官をともなって法廷にあらわれると、廷内に居合わせた全員が起立して彼女らを迎えた。

法壇の中程まできたところで、彼女は軽く会釈して着席した。

彼女の両側に二人の陪席裁判官が腰を下ろした。

もう、このとき、検察官や弁護人、被告人、それに傍聴人たちが、それぞれの席に座っている。

傍聴人の中に、彼女のストーカーとみられる男の顔が、今日も三人ばかり見られた。年齢は三十代から五十代で、共通して言えることは、とろんとした精気のない眼差しを、じっと

彼女に注ぎながら、物欲しげに唇をなめたりする。

その三人は、彼女の法廷には、ほとんど毎回、姿を見せるが、チームを組んでいるわけではなさそうだし、これまでのところ、危害を加えるようなことはなかった。帰宅途中を待ちぶせして声をかけるとか、あとをつけてくるとか、そういう気配もない。

とはいうものの、そのうち、思いがけない行動に出るのではないかと、ふと彼女は不安になることもあった。

女性の裁判官など、かつてのころにくらべると、それほど珍しくないのだが、彼女の場合は、少し事情が違う。まだ彼女は四十歳にもならないのに、すでに統括判事であり、法廷では「裁判長」と呼ばれる立場にあることや、何よりも、その個性的な美貌と優れた知性とが人気の秘密であるらしい。

すっきりと通った鼻筋、夢見るような長い睫毛、妖しい宝石のような輝きをたたえる漆黒の瞳。そして情愛と感性の豊かさを思わせるまろやかで優美な顔立ちには、妥協を許さぬ凜々しさが秘められ、不思議な魅力に満ちていた。

黒い法服の襟元の白くきめ細かな肌に純白のスカーフをあしらい、控えめな薄化粧が、かえって彼女の気高さを引きたててもいた。雅た雰囲気のなかに清冽さがひそむ神秘的な魅力とでも言うべきだろうか。

ところで、今日の法廷では、判決の言い渡しが予定されていた。

判決を言い渡される予定の被告人は垂沢誠、三十八歳。ぎらぎらと脂ぎった凶暴な目つきをした髭面の男で、体格もがっしりとして、見るからに強面の感じだ。

罪状は殺人である。犯行の動機は、いたって単純で、ここ数年にわたる垂沢の暴力に耐えかねた妻が実家へ逃げ帰り、別居生活をつづけていたところへ、「女房に会わせろ」と垂沢が再三にわたって実家をたずね、そのたびに拒否されていた。

そうこうするうちに、別居中の妻が垂沢を相手方として、家庭裁判所へ離婚調停の申し立をした。

そのことにも、垂沢は腹を立て、深夜に実家へ押しかけ、大声をあげて怒鳴ったり、玄関ドアを足で蹴ったりして騒ぎを起こすことが何度かあった。

パトカーのサイレンの音が聞こえると、逃げ出す始末で、なかなか現場が押さえられない。

そのうちに、思いがけない惨劇が起こった。

深夜に、妻の実家の窓ガラスを破って屋内へ侵入した垂沢は、妻と両親を前にして復縁を迫ったが、聞きいれられなかったことから激高し、携帯していたカスタムナイフで妻の腹部を刺した。止めに入った両親をも刺殺し、深手を負いながら屋外へ飛び出し、逃げ惑う妻を

追って、その背中に血塗られたナイフを突き立てたのである。

三人の被害者は、ほとんど即死に近い状態だった。

ただ一人、その夜、殺された妻の妹がたまたま実家の離れ家で寝ていたのであるが、騒ぎを聞いて起き出し、近所の人に救助を求めて家から逃げ出したために、難をまぬがれた。

やがて駆けつけたパトカーに垂沢は逮捕されている。

いかにも凶悪な犯行だったが、垂沢は酒を飲んでおり、アルコールの勢いもあって凶行におよんだ点や、警察や検察庁の取り調べに対しては、素直に自白したことなどを考慮して、検察官は、無期懲役を求刑していた。

しかし、松宮亜紀子の考えでは、検察官の求刑が軽きに過ぎ、死刑が妥当であると刑事第四部の合議のさいに主張した。

これに対して、二人の陪席裁判官の意見が割れ、合議が紛糾（ふんきゅう）したのである。

結局、三人の裁判官の全員一致の結論が得られず、多数決により、検察官の求刑を超える死刑が妥当であるという結論になった。

この結論に最後まで反対したのは、右陪席裁判官の片桐秀男（かたぎりひでお）だった。

片桐は、エリートコースを突き進む年下の松宮亜紀子につねづね反感を抱いており、何かにつけて反対意見を主張して譲らない。今回の垂沢誠の事件についても、そうだった。

松宮亜紀子は、判決書を手に取ると、被告人席の垂沢誠を見やって、
「では判決を言い渡しますので、被告人は起立して、法壇の下まできてください」
そう言うと、垂沢誠は、嫌味ったらしく唇を歪(ゆが)め、のっそりと腰を浮かせて、法壇の下へ歩み寄ると、上目づかいにじろっと松宮亜紀子を見上げた。
その眼差しには、不安と恐怖が入りまじった憎しみがこめられていた。
松宮亜紀子は、冷静な態度で判決書の主文を朗読した。
「主文。被告人は死刑。訴訟費用は被告人の負担とする」
引きつづいて松宮亜紀子が判決理由を述べようとした瞬間、目の前に突如として黒い影が走った。
ハッとして彼女が顔を上げたとき、すでに、垂沢誠の憎悪に満ちた形相(ぎょうそう)が間近に迫っていた。
丸太のような太い腕が素早く伸び、彼女の法服の襟を鷲掴(わしづか)みにした。
垂沢は付き添っている刑務官の制止を振りきって、書記官席の後ろへまわりこみ、法壇ごしに彼女に襲いかかったのである。
「なんでおれが死刑になるんだ！　検察官の求刑は無期懲役なんだぞ。くそッ、この女(あま)！」
凶暴な光をたたえた垂沢の獣(けもの)じみた目が、彼女を突き刺すように睨(にら)みつけていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

刑務官が二人がかりで垂沢を押さえつけ、書記官までが加勢して、強引に垂沢を押さえこもうとするが、なかなか果たせない。

凄(すさ)まじいばかりの怪力だ。

垂沢は死にもの狂いで彼女の法服の襟を摑んでねじりあげ、首を絞めようとしている。

さすがの彼女も、ここまでくると、もはや我慢がならない。許せないという激しい怒りがこみあげてきた。

学生時代に鍛え上げた柔道の技が自制心を越えて甦(よみがえ)った。

サッと立ち上がった彼女は、法服の襟を摑んで放さない屈強な男の腕を逆手(さかて)に取って、ひねり上げ、相手がバランスを失ったところを一気に突き飛ばした。

法服の襟がビリッと裂けた。

不意を衝(つ)かれた垂沢は、「あッ」と奇声を発し、ぶったまげて床に転倒するかに見えたが、刑務官らに支えられ、ことなきを得た。

ぜーぜー息をあえがせながら、刑務官らに両腕を摑まれ、松宮亜紀子を睨みつけている垂沢に向かって、彼女は、

「いいですか。死刑になるのが、そんなに怖いのなら、自分で首を吊って死になさいよ！」

冷厳と言い放った彼女の表情には、暴発寸前のぎりぎりのところで踏みとどまった裁判官

としてのプライドが色濃く滲(にじ)み出ていた。

2

裁判官室へ戻った松宮亜紀子は、破れた法服を脱ぎ捨て、自分のデスクに座ると、お茶を飲みながら、ぽつりと呟(つぶや)くように言った。

「私、どうかしていたんだわ。首を吊って死になさいなんて……ねえ、どうすればいいと思う？」

と彼女は、そばに居合わせる二人の陪席裁判官に問いかけるような口調で言い、溜息(ためいき)をもらした。

右陪席の片桐秀男が待っていましたとばかりに、

「記者会見でもして、謝罪すべきじゃないでしょうか。どのみち、マスコミは大喜びして騒ぎたてるでしょうけど……」

と言って、意地の悪い目で松宮亜紀子を見やった。

彼女が黙ってお茶を飲んでいると、またもや片桐は、嫌味ったらしく、こう付け加える。

「それとも、辞表でも出しますか？」

こういうのは、いつものことであり、松宮亜紀子は、さほど気にはしていない。

すばやく、左陪席の小倉亘（おぐらわたる）が松宮亜紀子に加勢した。

「辞表ですって？　その必要はありませんよ。法廷での部長の態度は当然です。アメリカだったら、法廷侮辱罪として、ただちに被告人の身柄を拘束し、厳罰に処するところです。日本でも法廷侮辱罪というのを設けるべきでしょう。私は、そう思います」

小倉は、三十一歳で独身。経験の浅い判事補にすぎないが、何かにつけて松宮亜紀子に肩入れする。

裁判官として、十年の経験を積まないと、判事にはなれず、それまでは判事補である。

だから、小倉にとって、片桐は、言うなれば先輩であるが、裁判官としては、あくまでも対等だった。

それはともかく、垂沢誠の犯した罪が死刑に値するかどうか、そのことについて、松宮亜紀子は、右陪席の片桐秀男や左陪席の小倉亘と再三にわたって合議し、議論をしたときのことを思い浮かべながら、デスクの上に置かれた垂沢誠の公判記録を手に取り、あらためて読み返してみた。

この事件の審理の過程で、彼女が最も重視したのは、有馬（ありま）さゆりという十九歳の女性の証言だった。

有馬さゆりは、被告人である垂沢誠の別居中の妻で、本件被害者の垂沢和代の妹である。事件の夜、たまたま、実家の離れ家に泊まっていたにもかかわらず、幸運にも難をまぬがれたのだった。

公判記録によると、有馬さゆりの証言は、およそ次のようなものだった。

彼女に質問したのは、垂沢誠の国選弁護人の北尾道雄である。彼の質問に対して、有馬さゆりは、このように答えている。

「私、東京で一人暮らしをしているんです。昼間はフルに働き、夜間は商業デザインの勉強がしたくて専門学校へ通っています。事件があった日は、たまたま休暇で京都の実家へ帰っていました。でも運よく難をまぬがれたんです」

「そのときのことを話してください」

「はい。あの晩、私は、実家の離れ家で寝ていたんですが、母屋と少し離れていますので、義兄さんも気づかなかったんだと思います」

有馬さゆりにしてみれば、証人として裁判所へ呼ばれて証言を求められるのは初めての経験なのだろうが、物怖じせずに、しっかりした口調で証言していた。

一見したところ、ほっそりとした体型だったが、やはり、そこは十九歳という若さのせいもあって、それなりに成熟した女性の肉感的な線が、爽やかな感じのワンピースを通して感

じられる。
「では、犯人が侵入したとき、あなたは眠っていたわけですか？」
「はい。ガラス窓が叩き割られる音がしたり、騒ぎが起こったりしたので、びっくりして目を覚ましたんです。間もなく、父や母、姉さんの悲鳴が聞こえて……」
「聞いたのは悲鳴だけですか？」
「いいえ。狂ったような叫び声とか……怒鳴りつける義兄（にい）さんの声がして……」
「犯人の顔を見ましたか？」
「いいえ。怖くて、部屋の中で震えていました。義兄さんが離れ家へ押しかけてくるんじゃないかと心配で……義兄さんは凶暴なんです。とりわけお酒を飲んでいるときなんか、手に負えなくて……これまでにも、何度か押しかけてきたらしくて、そのことは姉からも聞いていました。でも事件の夜は、ふつうじゃないって感じでした」
「ふつうじゃないとは？」
「つまり、その……うまく説明できませんが、暴れまわるというだけじゃなくて、何か酷（ひど）いことをしそうな感じでした」
「それで、あなたはどうしました？」
「警察へ電話しようと思って、携帯電話を探したんですが、どこに置いたのか、よくわから

なくて……両親や姉の悲鳴を聞きながら、私、おろおろするばかりでした」

「携帯電話が見つからず、結局、どうしたんですか？」

「裏口から戸外へ飛び出しました。近所の家へ駆けこんで、警察へ電話してもらおうと思って……実家は、民家がまばらに建っている寂しい場所なので、気軽に隣家へ声をかけるなんてこともできませんし……」

「それで、どうしました？」

「とにかく、わけもわからずに家から飛び出したんです。夜更けのことですから、どの家も明りが暗くて、起きているようには見えず、いっそ最寄りの交番へでも駆けこもうと思って、道路の角まできたとき、坂を下ってきた車に轢かれそうになったんです。ドライバーが心配して、『大丈夫ですか？　お怪我は？』と声をかけてくれました。そのとき、ふとした思いつきで、私、こう言ったんです。『お願いします。携帯電話で警察へ電話してほしいんです。いま、私の家に強盗が入って……両親や姉に危害を加えるかもしれないので……』。すると、そのドライバーの方は、びっくりして、『とりあえず一一〇番しましょう』と言ってくれたんです。それから間もなく、パトカーや救急車が駆けつけてきて……でも、手遅れでした。両親も姉も、取り返しのつかないことになってしまったんです」

有馬さゆりは、声をつまらせ、嗚咽に咽び泣いた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com